

竹内愛『ジェンダーと災害の民族誌——変容する農民カーストとネワール社会』

■出版地：東京 ■出版社：風響社 ■出版年：2023年 ■総頁数：290頁 ■定価：4,000円＋税

菅野 美佐子*

本書は、ネパール中部に位置するネワール社会における女性たちの開発をめぐる実践を通じたジェンダー関係や役割の変容を描いたエスノグラフィーである。ヒンドゥー的価値イデオロギーのもと、厳格な女性規範にからめとられてきたネワール女性、とりわけ農民カーストであるジャブの女性たちの生活世界とその変化について、著者である竹内愛氏が現地フィールドワークでの参与観察やライフヒストリーの聞き取りから、その詳細を克明に記述しており、「ジェンダーと開発」や「災害支援とジェンダー」に関心のある読者にとって、興味深い事例や知見を提供する著書と言える。本書の事例の面白さは、ネワール社会に浸透した女性を主体とする地域開発プロジェクト「ミサ・プツァ」がもたらした、ネワール民族の独自の社会変革のあり方にある。つまり、ネワール社会に特有のヒンドゥー的社会構造やジェンダー規範に基づく発展プロセスを提示することで、西洋発の開発論やフェミニズム理論に対して、非西洋社会からのオルタナティブな理論を提示することが本書の主要な目的となっている。

本書は、3部構成となっており、研究対象地域および集団の概要と日常生活や社会関係などを描いた第I部、女性自助組織「ミサ・プツァ」の活動を通じた社会変容をあつかう第II部、そしてネパールにおける大地震および新型コロナウイルス感染症拡大への地元住民の対応を記述した第III部からなる。この各セクションに、第1章から第8章に終章を加えた全9章が、テーマに応じて配置されている。構成は以下の通りである。

目次
まえがき

- 第I部 農民カーストの社会と女性の立場
- 第1章 マッラ王朝の旧王都パタン——宗教的都市構造とネワール社会構造
- 第2章 ネワール農民カースト「ジャブ」の社会関係
- 第3章 ネワール農民カースト「ジャブ」のジェンダー構造
- 第II部 女性自助組織「ミサ・プツァ」とジェンダー変革
- 第4章 女性自助組織「ミサ・プツァ」の成立と発展
- 第5章 女性自助組織「ミサ・プツァ」の女性、社会への影響
- 第III部 地震災害とコロナ禍でのミサ・プツァ
- 第6章 ネパール大震災（二〇一五年）の被災と復興
- 第7章 COVID-19パンデミックとミサ・プツァ
- 第8章 開発途上地域における新たな女性像——災害レジリエンスとジェンダー
- 終章 女性の自立のための多様な道筋——ジェンダー人類学の視座から
- あとがき

ここで各章を概観しておこう。第I部では、本研究の対象となる地域や集団について、著者が20年にわたって実施してきたフィールドワークの記録をもとに詳細が述べられている。

第1章は、カトマンズ盆地南部の都市、パタンの地

* 青山学院大学

域的概要から始まる。パタンはマッラ王朝の旧王都として15世紀ごろから栄え、その都市構造はヒンドゥー教や仏教、ネワール民族独自の伝統的慣習が錯綜した曼荼羅の世界観を反映しているという。都市内部ではカースト諸集団が浄／不浄の観念に基づき空間的にも役割的にも棲み分けがなされ、浄性の高いブラーマン（僧侶）から不浄とされる肉屋や清掃人カーストに至るまで、序列化された社会構造が形成されている。ここで著者は年中行事である仮面舞踏劇に注目し、普段は分断されたカースト集団が一堂に会し、カーストの枠を越えて協働する様子を描く。著者は、舞踏劇という娯楽の祭祀を、参加者の遵守すべきカーストやジェンダーの規範を一時的に免除する空間とみる一方、そこに会する人々が己の役割や空間配置を通じて、上述の構造や規範を再認識する政治的な場を生成していると論じている。

第2章では、本書が対象とするネワール農民カーストのジャブの暮らしや集団の特性が描かれる。ジャブは農業を生業とする中位カーストであり、パタン人口のおよそ40%を占める最も人口規模の大きい集団である。ジャブ社会では祭祀儀礼から農作業や飲食物に至るまで互いに協力／共有し合い、与え／与えられる相互扶助の関係が重視されているという。1990年代にはジャブ農民の権利擁護や、耕地確保を実現するために相互扶助組織（ジャブ・サマージ）が結成され、パタン域内で政治的な力を発揮するのみならず、海外にもネットワークを広げている。こうした相互扶助的な組織は、近年の社会変化や男性の海外出稼ぎなどにより形を変えつつあるものの、コミュニティ内での親密な関係性は現在でも維持されていることが指摘される。

第3章では、ジャブ社会内部での「ジェンダー構造」に焦点が当てられる。ここでは女性の日常の暮らしやライフヒストリー、儀礼に関する詳細な記述から、ジャブ女性の家事労働やケア役割、家族・親族内での序列的な位置づけなどが検討されている。その記述からは、女性たちが月経によるケガレなどを理由にジェンダー構造の劣位に置かれ、とくに結婚後は厳格な規範を課せられることが理解される。そのことを端的に象徴する行為として、著者はバギャティと呼ばれる慣習を取り上げている。バギャティとは、神像や目上の人足に額をつけることで、相手への献身性や従属性、敬意などを示す挨拶の習慣であり、嫁たちは積極的にバギャティをすることで、婚家での良好な関係や立場を保とうとする。つまり、ジャブの女性たちは夫や嫁ぎ

先の家族に対して従順で献身的であることが求められる。一方で、儀礼時にはケガレを清める役割を担ったり、女神に擬えられ神聖視されたりするなど、その位置づけは両義的かつ流動的であることが論じられる。

続く第II部の第4章では、「ミサ・プツァ」と呼ばれる女性自助組織の設立過程や活動の社会への影響などが論じられる。「ミサ・プツァ」は、1990年代初めにドイツの開発プロジェクトの影響を受けた地元NGOと行政の主導のもとで創設された。設立当初は小規模融資、職業訓練、識字教育などのプログラムを提供していたが、2000年代に入ると各地で女性たちが自らミサ・プツァを立ち上げ始めた。初めは、女性を主体としたこの活動に対して、地域住民、とくに男性から理解が得られず、女性の参加に対する妨害行為が見られた。しかしジェンダーと開発における国際的潮流やそれに準じたネパール政府による女性政策などが後押しとなり、次第に活動が受け入れられるようになったという。女性たちはゴミのリサイクルやヤギの繁殖・販売への投資など、各々のニーズに即した事業を次々と立ち上げるようになり、次第にジャブ社会における「ジェンダー構造」にも変化が見られるようになった。

著者は、このような状況をミサ・プツァの内発的展開と位置づけ、続く第5章ではこれを可能にした背景として、ジャブ社会内部と外部とをつなぐ媒介者の存在に着目する。その事例として、地元NGO、地域開発局、ジャブ社会における相互扶助組織（ジャブ・サマージ）、そして同社会の自治を担う男性組織（マンカ・カラ）が取り上げられる。これらの媒介者とミサ・プツァの間には、互いの利害が交差するところに協働関係が生み出され、その結果、ジャブ社会におけるミサ・プツァの活動が発展したという。当事者への聞き取り調査から、本活動は女性たちに趣味や教養、生活上の実践力、安心できる居場所や相互扶助関係、アイデンティティの共有をもたらしたことが明らかとなった。著者は、彼女たちの人生においてこれらが肯定的な変化であることを認めつつも、ジャブ女性たちが自己の個人的な利益よりも、家族、親族、さらにはカーストを越えて地縁でつながる人々と福利を共有する集団的發展を希求していると指摘する。

第III部では、2015年にネパールを襲った大地震と2020年に始まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックという状況下で、どのようにミサ・プツァの活動が実践され、災害支援という枠組みに位置づけら

れたのが論じられる。

第6章ではネパール大地震の復興の諸相が描かれる。ジャブのとあるミサ・プツアの事例では、地震の直後に女性たちが男性組織（マンカ・カラ）との共同で炊き出しを行ったり、同組織の資金から、被災者の家屋の修復に融資をしたり、避難用テントを提供したりするなどの支援活動が行われた。また、震災の影響が落ち着くと、観光客の誘致や市内でのブティック店経営、高齢者のデイケアルームの設置にも取り組んだ。他方、ジャブよりも下位に位置する低カーストのコミュニティではそもそもの人口が少なく、ミサ・プツアの活動は震災以前から停滞気味であり、復興のための活動もなく各世帯が個別の対応を強いられていた。また、ジャブ主体のミサ・プツアでも、震災前はカーストを越えて築かれていた相互扶助関係に断絶が生じ、カースト間のつながりの脆弱性が浮き彫りにされた。

第7章では、新型コロナウイルスのパンデミックによるロックダウン状況下での取り組みが紹介される。ミサ・プツアの女性たちは、パンデミックの最中、ジャブ社会内の男性組織や相互扶助組織とともに、様々な活動に乗り出した。例えば、ロックダウンにより仕事ができず当面の生活の糧を失った人々に対する食糧支援や衛生用品の配布などとともに、マスクの着用や手洗い、消毒などの衛生行動を呼びかけた。さらに、同地域の人々に見舞金の支給や、ワクチン接種の促進活動を行うなど、コロナ禍においても男性組織と同等に活動を継続していた。著者はこうした災害時における主体的な活動が、ミサ・プツアの社会的位置づけを引き上げ、当該社会における「ジェンダー構造の変革」を促すことにつながったと結論づける。

その上で第8章では、災害時のレジリエンスについて言及し、ミサ・プツアの活動が既に確立しており、ニーズに合わせた活動が可能であったことや、組織内で家族のような関係性が築けていたことで、集団全体の復興に潤滑に取り組むことができたことと指摘する。災害時にどのような被害を受けるのか、あるいはどの程度の被害になるのか、そして、そこからどのように復興を遂げていくのかは、それぞれの置かれた立場や生活環境によって大きく異なる。上記の事例から、ジャブの女性たちが災害弱者ではなく復興主体となりえたのは、ミサ・プツアの活動を通して身につけた集団的レジリエンスに起因することが導き出される。

最終章では、西欧的なフェミニズム理論や開発論に

対する人類学的批判として、本論で論じたミサ・プツアの活動に従事するネパール女性の事例の位置づけがなされる。女性個人の自立や男女の平等な機会に焦点を当てる西欧フェミニズムや、アマルティア・センが提唱した個人のケイパビリティなどの枠組みではネパール女性の開発をめぐる諸行動を捉えることはできず、個人の利益よりも家族やコミュニティの発展を望む彼女たちには、集団全体の自立やケイパビリティの向上という別の観点が必要であると論じて本論は締め括られている。

つぎに、各章の内容を踏まえつつ、日本における主婦の地域活動と対比しながら、本研究の論点に関する批判的考察を試みる。評者にとって、ミサ・プツアを通じたジャブ女性たちの活動実践は、戦後の日本の主婦化した女性たちを想起させるものであった。明治期の日本では、強靱な国家形成に従事する夫を支え、強い男児を産み育てる「良妻賢母」の規範と役割が女性に課された。戦後の高度経済成長期においては、都市への大規模な人口集中が起こり、男性はサラリーマン、女性は主婦という近代家族が形成され、新たなジェンダー的価値変容がもたらされた（落合1989）。地方に残る親兄弟や親族との物理的距離が生じるなか、移住先において子ども会や町内会などの地域的なつながりが生まれ、夏祭りやクリスマス会などの季節ごとの行事や廃品回収や草刈りなどのボランティア活動、菓子づくり教室や裁縫教室、さらに生協の共同購入などへの参加を通じて女性同士の交流が盛んとなる。こうして、会社勤めのため地域社会との日常的関わりが希薄な男性にかわって、女性を中心とした地域の活性化が進められた。さらに一部の地域では、生活者クラブ生協などの活動から、家庭を維持し地域と密着する「女性ならではの視点」を武器に地方議員になる女性が現れるなど、公的な場への女性の進出も見られるようになった（山口2002）。こうした1960年代から80年代後半ごろの新たな日本女性像の構築は、日本が「一億総中流社会」といわれた時代において、女性が主婦業に専念できるだけの世帯内の経済力と、地域の女性たちと交流する時間を確保できたことが要因としては大きい。また明治期とは意味を変えつつも「良妻賢母」という女性規範を引き継ぎながら、日本社会を支える妻、母としての役割分業に強くからめとられていたことで、家族や地域住民の福利の向上を担う存在になったと考えられる。

このような観点から、本書が描くジャブ女性の事例

を捉えると、上記の日本女性との類似性が見て取れる。例えば、ミサ・プツァに参加する女性たちには、強いジェンダー規範に従いながらも、家庭内において経済的にも時間的にもある程度の余裕があり、女性同士の交流の余地が生み出されていた。また、女性個人ではなく家族や地域社会のための福利を希求する点でも、当時の日本女性たちが求めたものとの共通点が見られる。著者の説明にもあるように、ジャブはネワール社会においてカースト位階の中位に属し、女性たちは上位階層のように公的空間での活動が著しく制限されたり、女性のニーズが容易に充足できるだけの経済力をもち合わせたりしているわけではない。他方、下位階層のように経済的困窮のために女性も男性と同様の労働を余儀なくされ、社会活動に参加するだけの時間的、経済的資本がないというわけでもない。また、第1章にもあるとおり農民カースト、ジャブの人口規模はネワール社会において最大であり、上位階層ほどの地位や権威はないにしても、マジョリティ・カーストとして広範にわたる社会的ネットワークを保持していることが推察される。カーストを基盤とするポリティクスは南アジア社会に広く見られ、人口規模の大きいカースト集団が、その地域において高い政治力を発揮する傾向が見られる。すなわち、ジャブによるミサ・プツァの活動には、社会的、経済的、政治的側面において、著者が内発的発展と呼ぶ状況が実現できるだけの環境因子が揃っていたことを意味し、この点については著者も本論において言及している。

ここで、二つの疑問が浮かび上がる。一つ目は、ジャブによるミサ・プツァの活動事例の開発モデルとしての有用性である。すなわち、ジャブ女性が辿った内発的発展のプロセスが、開発による恩恵を最も必要とする経済的に余裕がなく、ネットワークも貧弱な低位階層の女性たちの暮らしを向上させる開発モデルとなりうるのかという点である。著者自身も終章において、低位階層の女性のミサ・プツァの活動による生活改善の限界についてわずかに触れているが、開発弱者、災害弱者とされる階層の人々の内発的発展について、十分に議論されているとは言い難い。ある特定の社会集団と密接な関わりをもちフィールドワークに臨む人類学の特性を考えれば、他集団の状況把握が困難となるのは致し方ない。だが、ジャブ女性の事例分析のみでネワール社会全体の内発的発展やジェンダー関係の変容を論じることが、とくにネワール社会を知らない読者に対して誤った理解をもたらしかねないことには十分

注意する必要があるだろう。

二つ目は、本書の議論の中心でもある「ジェンダー構造の変革(または変化)」という表現についてである。前述した本書の概要では評者も著者の表現に倣って同様の表現をしたものの、この表現には若干の違和感を覚える。著者はジャブ女性の公の場での活動や男性と対等に意見を主張し役割を担うようになった事例から、「ジェンダー構造への変革をもたらした」とする見解を示している。だが、これに対して評者は、ジャブ女性たちは、当該社会のジェンダー構造を崩すことなく、その構造内部において自身の新たな役割や立ち位置を見出したと捉えるのが妥当だと考える。先の日本の例に戻ると、1960年代から80年代に見られた女性の公共空間における活動も地域の活性化や政治活動にまで発展したが、その目的は家族や地域住民の福利の向上であり、女性のケア役割や「内助の功」、「良妻賢母」といった女性イメージは維持されたままであった。その傾向は女子の教育レベルが上昇し、夫婦共働きが増えた2020年代の現代日本においても多かれ少なかれ引き継がれており、日本における「ジェンダー構造の変革」には現在も乗り越えるべき課題が山積している。そもそも「ジェンダー構造」という語彙そのものが、著者が差異化を試みようとする西洋由来の概念であり、その変革というのは女性の個人主義的な自己実現や、男女役割分業、政治的、経済的機会といった、あらゆる場面における男女の平等という意味や目的が前提とされている。したがって、ネワール社会のジェンダー構造が変化していると主張するのであれば、序論などを設けてネワール社会独自の「ジェンダー構造」に関する議論を、関連する先行研究を通して精緻化し、明確に定義をした上で、各事例をより慎重に記述および分析するべきであろう。

仮に「ジェンダー構造の変革がもたらされた」とする著者の主張が正しいとしても、いかにして変革が可能になったのかというプロセスに関して、各事例をさらに深く掘り下げて実証分析する必要がある。というのも、第I部における男性優位のネワール社会で、女性は種々の行動の制約と「献身的」な役割が課されてきたとする議論と、第II部の、ミサ・プツァで活動する女性たちが、男性と同等の発言力や責任的立場を獲得し始め、そのことがジェンダー構造の変化につながったという変容のプロセスが、やや短絡的に論じられている印象を受けるからである。ミサ・プツァがいかにしてジェンダー規範の強い社会のなかで受け入れ

られるようになったのか。受け入れられるまでの間、女性たちは家父長的社会とどのような交渉を試みてきたのか。厳しいジェンダー規範やヒエラルキーへの従属と抵抗、ミサ・プツァという組織への信頼と疑念、組織に関わる女性たち間での連帯と不和など、様々な場面において当事者たちのなかでどのような葛藤が見られたのか。こうした疑問について十分な答えを示すには、第I部と第II部の連続性が欠如しているように思われる。ネットワーク女性の観念的位置づけや家庭や儀礼における役割、さらに家族や親族との日常的関わりや彼女たち自身の価値意識といった要素の、どの部分がどのようにミサ・プツァの活動実践やそれに伴う価値意識の変容と接合しているのか。こうした分析を、読者の想像まかせにするのではなく著者自身が丁寧に論述することで、「構造的変革」の議論はさらに説得力が増し、開発モデルとしての意義も高められただろう。

最後に、考察では触れなかったが、本書の災害人類学としての位置づけについて触れて本稿を締め括りたい。第III部は、ネパール地震や新型コロナウイルス感

染症拡大の状況を事例とした災害民族誌となっている。著者がこれらの比較的新しい事象から、現地の人々の災害への対応についての民族誌的な記述に挑むことができたのは、20年という年月をかけて現地の人々との緊密な関係性を築き、彼らの生活世界を詳細に観察してきたフィールドワークの実績があつてこそといえるだろう。近年、自然、人為的にかかわらず災害が世界中で増加する傾向にあり、いつ起こるかかわからない非常事態にいかに対応しうるのかという地域社会や個人のレジリエンスが改めて問われる時代となっている。その意味で、本研究には大いに伸び代があり、先に指摘した「ジェンダー構造の変革」の議論を含め、今後のさらなる研究の深化に期待を寄せるところである。

参考文献

落合恵美子

1989 『近代家族とフェミニズム』勁草書房。

山口裕司

2002 「日本における女性政治家の現状と課題」『宮崎公立大学人文学部紀要』9(1): 199-211。